



1988-10

No. 241

【表紙】

江戸小紋 菊格子
小宮康孝
1985年作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：オーケストラ

今日のオーケストラと その歴史	藤田 由之	4
音の蔭	岩城 宏之	8
オーケストラ・ディレクターの 泣きどころ	長谷 恭男	11
日本のオーケストラ 世界のオーケストラ	文化庁芸術課	14

ぶんかブンカ

ウィーンでのオペラ『椿姫』に めぐり会って	山崎伸子	18
— 在外研修員として得たもの —		

都道府県のページ

〔我が県の文化行政⑩〕 富山からの文化メッセージ	富山県	19
〔特色ある文化活動⑩〕 世界へむけての挑戦	湯布院映画祭	22

文化庁だより

〔報告〕 中国帰国者に対する日本語指導者研修会及び 日本語指導研究協議会、日本語教育研究協 会の開催	24
〔文化庁ニュース〕 文化庁の昭和64年度概算要求まとまる	25
〔展覧会紹介〕 日本の考古学—その歩みと成果— 幾内と東国—埋もれた律令国家— 現代イギリスの工芸 日本のアニメーション	28 28 29 29

- 文化庁行事報告及び予定 30
- 国立劇場ニュース 31

ウィーンでのオペラ
『椿姫』にめぐり会って

—在外研修員として得たもの—



山崎伸子

文化庁の在外研修員として昭和五十四年から二年間、スイスへ留学させてもらいました。その間専門のチェロの勉強の収穫はもちろんながら、音楽家としての自分のあり方について意をかためることができたことが最も大きな収穫でした。

それは、何といっても数々の素晴らしい音楽会に接することができたことが大きな要因です。その中でもウィーン国立歌劇場で観た『椿姫』は、その最も大きな引き金となりました。私のオペラ観劇は、スイスのジュネーブから十三時間も列車にゆられてのものでしたが、そのウィーン国立歌劇場で聴いた（実は天井敷敷でしたが）グルベローヴァ（ソプラノ）主演の『椿姫』は、もう言葉では言いつくせない素晴らしい演奏でした。残念ながら、今は主演のグルベローヴァの名前とオーケストラがウ

ィーン・フィルであったことしか記憶にないのですが、とにかく素晴らしい演奏で、まさに鳥肌が立つという感動を味わったのです。この時は、ウィーン・フィルの第一音からすごかったのです。音が生命を得ているように、一つ一つのフレーズが私の心に語りかけてくるのです。それは決して大袈裟ではなく、実に自然な演奏なのですが、音楽が最適な言葉となって語りかけてくるのです。このような強烈な体験は初めてでした。

一体このような音楽は、どうして生まれてくるのでしょうか。やはり歴史なのでしょう。日本のオーケストラも、テクニクでは、もうほとんど遜色はありません。しかし、音楽の言葉の点になると、時には相当隔たりのあるものもあるように思います。いや、私自身のチェロについてもそうなんです。テクニクは、個人の努力によつてヨーロッパ人を超えることもできます。しかし、音楽の表現、即ち音楽を言葉として語りかける演奏ができるようになるには、相当な音楽的体験と努力とが必要なんです。しかも、ヨーロッパ人と同じようにはいきようがないでしょう。それは、言語、生活、習慣等がみな違うからです。そこで、日本人は日本人としての、そして個人としての言葉を持たなければならぬのだということをこの演奏を聴いて痛切に感じたのです。日本人として、小沢征爾さんや若杉弘さんたちが、欧米で立派な仕事をしておられますが、それはそれぞれが音楽の言葉を持

っておられるからです。

もちろん、その言葉は、自分にしか通用しない一人よがりのものではないけません。より多くの人達に聴き取ってもらえる説得力のある言葉でなければなりません。

それでは、どのようにしたらその言葉はつくれるのでしょうか……。私はこのように考えるのです。それは、まず自分が如何に純粋に音楽に対峙し、作曲者の心をつかもうと努力するかではないかと。もちろん、ヨーロッパど日本とは生活や習慣など外面的な部分では大きな違いがあり、そこから醸し出される音楽表現の味わいの違いはあります。しかし、人として喜怒哀楽を感じる心は、ヨーロッパ人も日本人も根底では同じではないかと思ふのです。ですから、その純粋な音楽との対峙と作曲者の心をつかもうとする努力があれば、日本人でも必ずヨーロッパ音楽を理解することができると思ふのです。そして、そのような純粋な姿勢による努力の成果が、私の演奏を聴いてくださる方々の耳に、日本人としての、私個人としての音楽の言葉となつて伝わっていくのではないかと思つたのです。ウィーンでめぐり会ったオペラ『椿姫』で、そのことを強く感じ、意をかたくしたのです。ヨーロッパへ行けてよかった。そして、あの『椿姫』にめぐり会えてよかった。このことを思い出す度に在外研修員として留学させていただくことのできた有難さをあらためてかみしめているのです。

(チエロ奏者)

編集後記

音楽を鑑賞していると、現代社会の喧騒からしばし解放される気がします。コマージュにせよカラオケにせよ、音楽に対する需要は日々増す一方です。ところで、九月中旬に始まったゾウルオリンピックも間もなくフィナーレを迎えます。スポーツがそうであるように、文化についてもまた、頂点のレベルを高めることと、裾野を広げることが二つの重要な施策の柱となります。芸術祭が前者の例とするならば、国民文化祭は後者の例と言えるでしょう。

十月一日、芸術祭はNHK交響樂團による「オーケストラへの誘い」で幕を開けます。頂点を極めた高度な芸術は、そこで発表の場を得るのです。芸術の秋。単に喧騒からの脱皮というだけではなく、もっと積極的に芸術に触れてみたい気がします。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八二二四(代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第二四二号)

昭和63年10月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社〒104東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所〒162東京都新宿区西五軒町52番地

電話(〇三)二六八一二四(代表)

振替口座 東京 九一一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五百円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)